



Vol.14

ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ランコ(カツラ)



先日、ポロト湖畔を一周した際、カ
ツラの木に赤紫色の花が咲いている
のを見つけました。ポロト湖周辺はカツラが
多く自生していて四季折々の姿を楽しませ
てくれます。枝全体に可愛いハート形の葉を
二枚向かい合うようにつけるので、木を覚え
るのが苦手な私ですが、カツラは見分けるこ
とのできる数少ない木のひとつ。

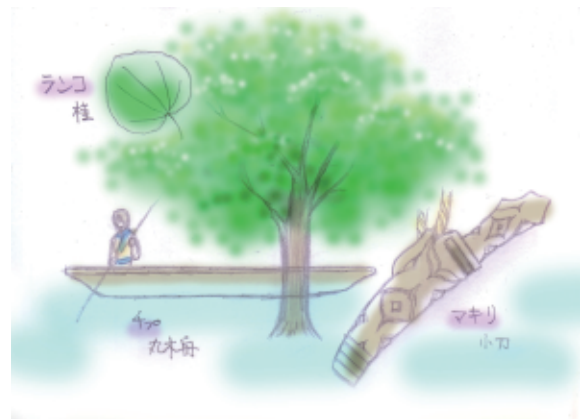
カツラはアイヌ語でランコ。地名の蘭越町
や千歳市内の蘭越はランコ・ウシ(カツラ・群
生している所)とカツラが語源。太いものだ
と直径が2mにもなるカツラは、ハリギリと
並んで舟材として使われたほか、盆や臼、ま
な板などの生活用具の材料としても多く使
われたとのこと。工芸家の浦川太八さんが



二風谷で暮
らし始めて間も

「木彫の材料にはランコは柔らかくて彫りや
すいし、漁師が使うマキリ(小刀)の柄をラン
コでつくると、軽いから落としても水に浮い
て直ぐに見つかるんだ。」って言っていたの。
用途にあった材料選びがされてるよね。
このランコ、秋に黄葉して葉が落ちると、
何ともいえない甘い綿菓子のような香り
がするんだよね。まるで、森の中のお菓子屋
さんみたいな…。ほのかな甘い香りに、思わず
足を止めて大きく深呼吸することもしばし
ば。でも、落ちた葉一枚一枚の匂いを嗅いで
も、そんなに匂わないんだよね、不思議なこ
とに。優子さん、ランコは女の神さまといわれ
るだけあって端正で優しい印象の木だよな。

ない頃、アイヌ文化資料
館長の萱野茂先生が、
木を指さしながらこう
おっしゃったの。
「あの木は精神がいい」。
植物や動物に対して
「精神」という言葉がご
く普通に使われること
にとっても感動したのを
覚えてます。
立ち姿が美しく人間



と言われた。ところが六年目に入っ
たので、待ちきれずに海に出たと
ころ、恐ろしい化物に追われ、タ
コとシャチの神のおかげで命だけは
助かったが、顔も体もただれて妖
怪のような姿になってしまった。
——なんとも恐ろしい話。で
も実は、道具というものは、
作った以上はきちんと使うべ
きだという教えが込められて
います。また、樹木と人間の
暮らしとの強い結びつきがう
かがえ、私の好きな物語の二つ
です。①



の役に立つことが、「精神が良い木」の条件
で、最高の舟材だったカツラはその代表格。
かつて人や物資の移動はもっぱら海と川。だ
からこそ、舟は最も大切な生活道具であり、
命を託す大切なカムイ(神)でした。そうい
えば、舟同士が喧嘩する物語が知られてる
よね。

夜中に音がするので主人公の男が行ってみたら、ハ
リギリの舟がカツラの舟に舫をぶつけて激しく虐げ
ていた。その夜、夢に美しい女神が現れ、自分はカツ
ラの木だが、男がカツラの舟ばかり使うのでハリギリ
の舟が恨んでおり、このままでは村に恐ろしいことが
起こるといふ。その夢を父親に話すと、ハリギリの舟
と切り株を一緒に燃やし、以後六年間は漁に出るな
と

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。